

生 *Seikatsu Bunkashi* 史

生活文化

<史料館だより>

目 次

- ◇岡田茂左衛門家と深江…………… 大国 正美 (2)
- ◇深江の心象風景 (1)
 - 氏神と踊り松…………… 筆者 岡田 茂義 (12)
 - …………… 解題 大国 正美
- ◇深江物語 (11)
 - 正寿寺の創立と幕末の事件…………… 森口 健一 (22)
- ◇史料館の図書貸出サービスが最多更新…………… (28)
- ◇史料館日誌抄…………… 道谷 卓 (28)

2021.3.31
NO.49

本家・網屋茂左衛門旧宅は、岡田善蔵が受け継ぎ、分家の南岡田家宅となった。茂左衛門は北に新宅を建てたが昭和20年の空襲で焼失。南



岡田家宅になった茂左衛門旧宅は、国道43号線の用地になり北側に曳家工法で曳行された。しかし阪神・淡路大震災で全壊、東側に増築した部分だけがかるうじて残った。昭和31年ごろの写真という。(岡田堯至氏提供)

神戸深江生活文化史料館

代目岡田茂義氏以降から敬称を付けることにする。

岡田家の系譜

昭和十七年に本庄村の囃託として村史編さんに着手した松田直市が筆写した岡田家の系図が複数残っている。これをもとに作成した岡田茂左衛門家の系譜は以下の通りである。

初代茂左衛門 生没年不詳。妻は正徳四年（一七一四）没。

二代茂左衛門（？～一七二四）。妻（一六六四～一七三四）。

三代茂左衛門（一六九一～一七五〇）。六〇歳。

妻は中野村仲右衛門女（一六九七～一七六八）。

四代茂左衛門（一七二一～一七九七）。七七歳。網屋を屋号として、石碑に記載された人物である。初名彦三郎、深江村岡源左衛門男。茂左衛門の養子となって宝暦元年（一七五一）家督を継ぎ農業・漁業で家運を隆盛に導いた。天明七年（一七八七）に深江村年寄となるのが村役人としての初見。明治二十九年（一八九六）に武庫郡長阿部光忠が文を作り自ら



写真1 武庫郡長阿部光忠による網屋茂左衛門顕彰碑(岡田堯至氏宅)

筆を執った顕彰碑が岡田堯至氏宅に現存している（写真1）。この石碑は、元は北側の岡田茂左衛門邸の南壁際に立っていたが南岡田家住宅を岡田茂左衛門邸跡地に曳行した際、南岡田家敷地内の石碑になった。石碑は高さ一五三寸、横九一寸である。以下碑文を引用する。

網屋茂左衛門之碑

網屋茂左衛門 幼名を彦三郎といふ、岡田正蔵五世の祖なり、実は摂津国英原郡深江村の岡源左衛門の二男にて享保六年に生る、宝暦元年網屋茂左衛門の後を承けその名を襲て曾孫のときに氏を岡田と改む、それか子そいまの正蔵にはありける、茂左衛門若きときよりたなつものつくるわさに力を尽し、かたはら海幸に心をよせて勉勵みしかば人にしらるゝ富人とはなれりけり、されと聊も奢る事なくつゝまやかにして常に貧しきものに思むをもて棄とせり、明和八年邨の正寿寺を造替するにその事にあつかりていたく力を尽した程に過ぎたる金を施入せり、これ他の勳進をそかむとの心なりしとそ、さればいたく邨人にみやまはれけり、かくて寛政九年十月十八日身まかりぬ、齢七十有七にむありける、正蔵このころおのれにいへらく、わか家のこの邨にてかすまへらるゝハ全く五代の祖の功なり、そのいさをはもとよりうみの子のつきく遠き世に語りつくべけれど、猶永代のしるしに石碑をたておかまほしうこそおほゆれ、いかでその文をと切に乞ふに、そはいとよき事なりと、やかてきけるまゝを書しるしてさてうたへらく

うみの子の 八十つきくくに いひつかひ

かたりつかぬむ あはれその名を
明治廿九年九月
兵庫縣武庫郡長 從七位 阿部光忠撰并書

この碑文によれば茂左衛門は富人になったにも関わらず奢ることなく貧者に恵みを与えることを楽しみとした。明和八年（一七七二）の菩提寺正寿寺の造営では多額の寄進を行った。八代目の正藏は深江村有数の有力な家にも創り上げた四代茂左衛門の功績を後世に伝えるために郡長阿部光忠に頼んで文を書いてもらったという。

妻はたね（一七三六〜一八一七）。

五代茂左衛門（一七五八〜一八一八）。七一歳。初名善藏、文政七年（一八二四）に庄屋となるのが初見。

妻は岡本村西田金左衛門女やき（一七六四〜一八四三）。

六代茂左衛門（一七八九〈宗盲人別帳には一七八八年生まれとあり〉〜一八五〇）。六五歳。初名林藏、後善藏、天保三年（一八三二）・同四年庄屋、前妻きやう。

後妻は生田村勝見吉左衛門二女まつ（一八〇五〜一八八四）。

七代茂左衛門（一八二五〜一九〇〇）。七七歳。初名松藏、生田村榎屋甚五郎の三男。弘化二年（一八四五）茂左衛門の養子となり、文久二年（一八六二）から庄屋、姓を岡田と定める。

妻はたき（一八三二〜一九一三）。

八代正藏（一八五四〜一九三四）。八一歳。明治十年（一八七七）家名相続、明治十五年第九戸長役場（深江・森・津知・三条・芦屋）戸長、明治二十七年〜二十八年本庄村（深江・青木・

西青木）村長。弟善藏が本家の南に分家を作り南岡田となる。網屋茂左衛門文書は南岡田家に継承され現在は、善藏の孫の堯至氏所有で、史料館に寄託中。

妻いくは日西原村湖上儀三郎長女（一八五八〜一九四三）。

九代茂左衛門（一八七二〜一九四九）。初名正市、川辺郡東桑津



岡田茂左衛門

村林善介四男。正藏の女えいと結婚、分家東岡田を創立するが大正十二年（一九二三）本家を相続。昭和十八年（一九四二）から四年間本庄村長。妻えい（一八七九〜一九三二）。五三

歳。

一〇代茂義氏（一九〇七〜二〇〇三）。旧制神戸商業大学（神戸大学の前身）第一回卒業、三和銀行入行、内幸町支店長、堂島支店長、京都支店長や監査役を歴任。

前妻は姫路市豆腐町、山本寿雄二女知恵さん（一九一三〜一九四三）。後妻は井上忠也陸軍中將の二女、よし子さん（一九一九〜二〇一三）。

江戸期から明治時代に石造物次々寄進

深江の惣氏神である森の稲荷神社（東灘区森北町）には、文政五年（一八二二）に奉納された立派な石造の手水鉢があり、それに願主の面々の中に「深江村 岡 茂左衛門」と彫られている（写真？、拓本）。江戸時代は姓の頭文字だけを表記することがよくあるので、「岡 茂左衛門」は岡田家のことと思われる、網屋を屋号としてつづ私的に苗字を名乗っていることが推測される。正藏の曾祖父、五代目茂左衛門と思われる。



写真3 岡田正蔵が明治18年に稲荷神社に寄進した玉垣



写真2 稲荷神社の石造の手水鉢と拓本（東瀬区森北町）



写真4 岡田正蔵いく夫妻が寄進した狛犬。震災で台座を残して壊れ茂義氏が修復した。金属のプレートで由来が記載されている（大日靈女神社）

明治から大正にかけて、八代目当主の岡田正蔵は深江の大日靈女神社や森の稲荷神社、正寿寺に灯籠や玉垣などを相次いで寄進した。確認されている中で最も古いのは明治十八年（一八八五）に森の稲荷神社に玉垣（写真3）を、正寿寺に東岡田家と井戸枠を寄進した。以降の寄進の状況は十一ページの表の通りである。深江の大日靈女神社（通称大日神社）へは大正十三年（一九一四）には稲荷神社とともに狛犬を奉納した。この二つの狛犬は妻いくと連名で、夫婦そろって名前を刻むのは珍しいのではない（写真4）。

また稲荷神社に明治二十七年（一九一四）に奉納した灯籠は「野間門人中」が建てたもので、岡田正蔵は野村平兵衛とともに世話人となっている（写真5）。「野間」とは天保七年（一八三六）ごろ播磨国小野（小野市）から深江に来た寺子屋の教師野間本造で、漢籍・珠算・書道を村人の子弟に教えた。学徳に優れ慕

う人が多かったが、慶応年間（一八六五〜六八）に病死した。墓は死後しばらく経って明治十一年に建てられた。岡田正蔵は安政元年（一八五四）深江生まれなので、野間本造に読み書きを習ったのだろう。

さらに明治十八年の玉垣の北側に石灯笼（写真6）があり、「本庄村史」編纂時には「献燈」「保存講」「世話人岡田正蔵」と読めるが、樹木に覆われて調査が不能だった。今回改めて調査したところ、「大正五年三月五日満念紀念」と解読することができた。ただ保存講の詳細については不詳である。また世話人はほかにも名前が刻まれているが陰刻が浅くまた踏み段が設けられ判読ができない。



写真5 岡田正蔵らが世話人になって「野間門人中」で建てた灯笼（森の稲荷神社）



写真6 岡田正蔵が世話人となって大正5年奉納した保存講の灯笼（同）

村長岡田茂左衛門の足跡と反骨精神

正蔵の養子、九代目茂左衛門（初名正市）が関係した石造遺物としては、大正十一年の大日靈女神社の玉垣の寄附芳名録碑に、養父正蔵と連名で「正市」の名前が掲げられている（写真7）。茂左衛門を襲名してからは、昭和九年（一九三四）昭和天皇の皇太子（現上皇）誕生を祝って大日靈女神社の入り口に建立された石大鳥居建立に貢献した。この石大鳥居の奉献者芳名録碑には、最高額の寄付者として筆頭に岡田茂左衛門の名前が彫られている（写真8）。

また茂左衛門が組合長を担った灘深江土地地区画整理事業は、神戸市の道路整備の都市計画に合わせまっすぐな道路を通し、



写真7 父正蔵と正市の連名の玉垣の寄附芳名録碑（大日靈女神社）



写真8 石大鳥居の奉献者芳名録碑に刻まれた岡田茂左衛門の名（大日靈女神社）

耕地の区画や地目を変更し、公園や溝なども設けて近代化をしようというものだった。現在の阪神電車の線路の北部は当時大半が江戸時代以来の田畑のままだった。権利者である組合員は一三九人の多数に及び、深江

在住者は六九人だけで神戸市から大阪市まで周辺地域に広がっていた。昭和九年に起工し昭和十二年に竣工、これを記念して昭和十四年に本庄公園の入り口に立派な竣工記念碑を建てた（写真9）。表面に岡田茂左衛門組合長と関係者の名前、裏面に「整地記念」の文字と湊川神社の宮司が揮毫したことが彫られている。

もう一つ忘れられないのは本庄墓地にある磯野萬治（次）郎の顕彰碑である（写真10）。磯野萬治郎は、深江の旧家磯野助左衛門家に生まれ、分家した篤農家である（松田直市筆写『本庄村誌資料』第七巻）。昭和十八年五月、岡田茂左衛門が碑文を起



写真9 岡田茂左衛門が組合長だった深江土地区画整理竣工記念碑（本庄公園）



写真10 憲兵隊のために死に至らされた磯野萬治郎のために岡田茂左衛門が起草した顕彰碑（本庄墓地）

草し、昭和十九年一月、有志が建立した。岡田茂左衛門は磯野萬治郎の功績として①村会議員三期②農会副会長として耕地整理・農事改良に率先垂範した③篤農家として知事賞受賞④深江衛生組合長として更生施設に尽くし知事表彰を挙げ、

村ノ先覚者・指導者トシテ郷党ノ景仰スル所ナリシニ突如トシテソノ訃ニ接ス、痛惜ニ堪ヘザルナリ、然レドモ君ガ村各般ノ事ニ巨リ残シタル功績ハ永ク村史ニ伝ヘ村発展ト共ニ輝キマサン、君以テ願スベシ、謹ンデ弔意ヲ表ス

と最大限の称賛をしている。しかしこの顕彰碑を建てたのはこれだけの功績のためではなく、記載されていない事実がある。磯野萬治郎は、昭和十八年川西航空機への農地売却を拒み、神戸の憲兵分隊で暴行され亡くなった。国策に反対し憲兵隊に死に至らされた人物を、死の直後に顕彰したのである。戦時下で顕彰碑を建てること自体、大変な軋轢があっただろう。あえてこの時期にこれほど立派な石碑を建てた深江の人々、「痛惜ニ堪ヘザルナリ」と書いた岡田茂左衛門に軍国主義に対する反骨精神、突然の同胞の死に対する怒りと悔しさが読み取れる。

岡田茂左衛門元村長の弔辞の発見

『本庄村史』歴史編の編さんで岡田茂左衛門家への調査のため、一〇代目の岡田茂義氏の子夫人に初めて手紙を差し上げたのは、平成十四年（二〇〇二）十月だった。東京の岡田邸に深江や旧本庄村に関わる史料が何か残っていないだろうか、と思ったのである。

整理組合も組織と水が組合長として、長く、短日時に道路排水路の整備、整然たる宅地造成等、本村都市發展の素因たる区劃整備の大事業を完成せらる。

ついで昭和十六年秋、恰も戦時下、本村が軍需工部の一環として劃期的飛躍發展途上にあるとき、選出された木村長に就任七十歳の高齡をも類みず、日夜、夜、職務に精勵、上水道の布設も、村立幼稚園、村立幼稚園の創設等、公共の事業に盡精、村民の福利増進に身共せしめ、功績は洵に大なるべし。

写真11 岡田茂左衛門元村長の吊辞

突然の便りに対し、深江に強い思いを抱いておられたよし子さんからはすぐさま返事をいただいた。残念ながらもその時は、めばしい史料調査はできなかったもの、その後、娘の上田禮子さんを伴って神戸深江生活文化史料館を訪問された。さらに平成十九年（二〇〇七）十二月に「仏壇の掃除をしていて見つけた」とのコメント付きで岡田茂左衛門元村長の吊辞を送っていただいた（写真11）。

この吊辞の発見で岡田茂左衛門（正市）の人情や業績が明確になった。明治四十三年（一九一〇）から本庄村村会議員を三期務め、昭和六年（一九三一）に深江土地区画整理組合の組合長となり道路や排水路を整備した。昭和十六年に軍需工場として川西航空機甲

南製作所（現新明和工業）が誘致され深江が都として飛躍的に発展するときに、七〇歳という高齢ながら村長に選ばれた。村長としては上水道の敷設、村立診療所や村立幼稚園の創設などを行ったことが吊辞に書かれていた。深江の地が都市基盤を整備する重要な時期に、戦時下にも関わらず村民の福利増進に努めたことが浮き彫りになる。

昭和二十年五月十一日と六月五日、八月六日に空襲で本庄村は壊滅的な被害を受けた。その死者はそれぞれ三七一人、八人、四人で、死者数は五月の空襲が突出していたが、役場も被災し「空襲では命からがらだった」とよし子さんに語ったという。

茂左衛門は養子として岡田家に入り、村会議員や村長などの公務のほか、深江だけでなく三田市などにまで及ぶ広大な所有地を管理した。農地の小作地のほか借家は一〇〇軒ほどにも及んだが空襲で深江の借家はほとんど灰になった。小作人に農地を低価格で売り渡す戦後改革の農地解放も体験する中で、先祖代々の土地を守ろうとした。空襲の焼け跡には、焼け出された被災者が勝手に建物を建てたため、一つ一つ裁判を通じて立ち退きを求める労苦を強いられた。

こうして残された岡田家の土地管理を引き継いだよし子さんは、晩年まで東京からほぼ毎月のように深江に通い続けた。茂左衛門村長が使っていた判子は空襲に遭った村役場から回収され、よし子さんが譲り受け使い続けた。受け継ぐ「象徴だった」。

震災を乗り越えた旧宅と次世代への願い

平成七年（一九九五）一月十七日に起きた阪神・淡路大震災では深江地区は阪神高速道路が横倒しになるなど、甚大な被害に遭った。岡田正蔵が大正十三年（一九二四）に大日靈女神社に寄進した狛犬も全壊した社殿の下敷きになった。幸い台座が残っていたことから、孫に当たる茂義氏が狛犬を再び奉納、震災を乗り越え狛犬が守られた。台座にはその旨が記載されている（前掲写真4）。また震災から丸二年後には、深江で亡くなった人たちの慰霊のため正寿寺に親鸞上人像を寄進している。ともに次世代へ伝える茂義氏のメッセージが感じられる。



写真12 阪神・淡路大震災を乗り越えて守られた岡田茂義氏邸の玄関



写真13 岡田茂義氏邸の南面（深江南町一丁目）



写真14 岡田茂義氏邸の玄関ホールとスタンドグラス（辻照夫氏提供）

る。

震災を乗り越えて守られたのは深江南町一丁目に残る昭和十三年（一九三八）建設の岡田茂義邸もそうである。岡田茂義邸は木造二階建て、一階六五坪（二二五平方尺）、二階四〇坪（一三三平方尺）で、スパニッシュ瓦葺きで大林組の施工である（写真12、13）。

一階にホール（写真14）・居間（写真15）・書斎（写真16）の洋室がそれぞれ暖炉付きで配置され、茶の間・老人室は和室の



写真15 居間の暖炉

和洋折衷。二階はサンルームを前面に設けた子供室が洋室で、寝室・床の間の客室、次の間は和室になっていた。階段や玄関にはステンドグラス（写真14）、芝生庭に面する南面には、サンルーム・広縁・ロジア（囲まれた半屋外の庭のスペース）などが設けられ、太陽光の季節変化をうまく取り入れられる。張り出た軒は雨の多い日本の風土に合わせた。

当時深江周辺には深江文化村をはじめ洋館が相次いで建てられており、こうした洋館建設ブームを反映しながらも、壁面や瓦の色調は落ち着いており、別荘ではなく本宅として設計されたために和風の要素を多く取り込んでいる。昭和前期の名望家の住まいの一例を考えるうえで貴重な建築物である。茂義氏の孫の福田卓矢さんは、関西の大学に進学、一時この家に住んだ。

阪神・淡路大震災では隣接の和風建築物は被害が大きかったが、本宅は東西に長い構造だったために甚大な被害を免れた。一時は解体・売却も検討されたが、岡田茂義氏の英断により保存修復されることになり、平成十四年（二〇〇二）四月から検討が進められ、同年十二月大林組が修復工事に着手し、瓦・外壁・建具・床タイル・暖炉・ステンドグラス・木軸・ガラス・樋・門扉の各部分を修復、再利用するため電気引き込み・給排水・ガス設備の更新も行い、翌平成十五年三月に完工した。

亡き人の思いを繋ぎ未来へ

茂義氏は深江を離れて久しかったが、父茂左衛門の五〇回忌を催した際に、九〇歳の高齢にも関わらず幼いころの記憶をたどり綴った「深江の心象風景」は、記憶力の確かさに驚かされ、



写真16 書斎



写真17 電灯

岡田本家ゆかりの石造遺物など

設置場所	年代	西暦	表題	刻名者
本庄公園	昭和14年	1939	深江土地区画整理組合	組合長岡田茂左衛門
本庄墓地	昭和19年	1944	磯野萬治郎顕彰碑	岡田茂左衛門
正寿寺	明治18年	1885	井戸杵	本岡田/東岡田
	平成9年	1997	親鸞上人像	岡田茂義
大日靈女神社	明治41年	1908	石燈籠	岡田正蔵
	大正11年	1922	玉垣寄付芳名録碑	岡田正蔵・岡田正市
	大正13年	1924	狛犬	岡田正蔵・いく (岡田茂義修復)
	昭和9年	1934	皇太子誕生記念大鳥居 奉獻者芳名録碑	岡田茂左衛門
	平成25年	2013	玉垣	岡田茂義・よし子
森の稲荷神社	文政5年	1822	水盤	岡 茂左衛門
	明治18年	1885	玉垣	岡田正蔵
	明治27年	1894	石燈籠(野間門人中)	岡田正蔵/野村平兵衛
	明治43年	1910	石燈籠	岡田正蔵
	大正3年	1914	石燈籠(保存講)	世話人岡田正蔵ほか
	明治44年	1911	狛犬	岡田正蔵
	大正13年	1924	狛犬	岡田正蔵・いく

同時にふるさと深江に対する暖かい眼差しにあふれている。茂義氏を支え、死後は茂義氏に代わってよし子さんは深江に通い続けた。二〇一三年に大日靈女神社の玉垣整備に際し、岡

田堯至さんのアドバイスで、すでに亡くなっていた岡田茂義氏の名前を彫り込んだ(写真18)。さらに西面の玉垣には死後の「岡田よし子」の名前を、娘の福田誠子さんの寄付によって彫り込まれている(写真19)。

よし子さんが九代目茂左衛門の弔辞を私に送付する際の添え書きに「自分の代で切れるのを納得せず、長女の長男を先方にお願ひして四歳の時養子に致し、浩一と申します」と岡田家に対する当時の熱い思いを紹介されていた。代を重ねて、東京と深江でつながる岡田茂左衛門家の縁。その家に伝えられた古文書、顕彰の石碑は本家の跡地に建つ分家の南岡田家を守り続ける。伝えられた史料の保全と活用にも協力しながら協力したい。

小稿の執筆にあたっては岡田堯至さん、福田誠子さんの協力を得た。末筆ながら深く感謝申し上げる。



写真19 福田誠子さんが「岡田よし子」の名前で寄進した玉垣



写真18 岡田よし子さんが「岡田茂義」の名前で寄進した玉垣

氏神と踊り松

筆者 岡田茂義

解題 大國正美

「深江の心象風景」解題

岡田本家一〇代目の岡田茂義氏が平成十年（一九九八）に父茂左衛門の五〇回忌に発行した「深江の心象風景」は優れた回顧録である。しかし法事に参加したごく少ない身内に配られただけで地元でも読んだことのある方はほとんどない。このため「生活文化史」で分割して復刻することにした。復刻にあたり、読みやすいようにこれまで史料館が四十年かけて収集した古写真も併用する。

連載に先立ち、岡田茂義氏の略歴や岡田茂義邸について、二女の福田誠子さんに東京で聞き取りした。

茂義氏の略歴

岡田茂義氏（写真1）は、明治四十年（一九〇七）二月、本庄村村長を務めた岡田茂左衛門の二男として生まれた。明治三十六年生まれの兄正敏は一歳余りでも早世していたので、両親からとても大事に育てられた。御影師範学校の付属小学校（現神戸大学附属住吉小学校）、旧制北



写真1 岡田茂義氏

野中学を卒業、旧制神戸高商に入学、同校は昭和四年（一九一九）に官立神戸商業大学（神戸大学の前身）に昇格したため、その

第一回卒業生となった。卒業後三和銀行に入学、はじめは大阪西支店など関西で勤務したが、昭和二十九年、東京・内幸町支店長となり上京、昭和三十二年堂島支店長、昭和三十五年京都支店長などを歴任、監査役を経て東洋不動産の常務取締役、日栄証券の専務取締役などを務めた。堂島支店長時代は夙川に、京都支店長時代には京都に支店長住宅があり、関西勤務の時期も深江の自宅を空けることも多かったようである。

話者の二女誠子さん（昭和二十四年生まれ）は芦屋の病院で生まれ、昭和二十九年に東京に転居、夙川の支店長宅を経て深江に戻ったのは昭和三十三年ごろ。そのころは田んぼが家の前に広がっていたという。このころは正月に行員を三〇人ほど招待するのが慣行になっていた。二階の和室では古い煙草盆（写真2）が使われ、今回、深江史料館に寄贈いただいた。

しかし誠子さんも深江での生活は長くはなく、昭和三十五年には京都の支店長宅に、昭和三十六年には神戸女学院中学の寄宿舎に入り昭和三十八年には再び東京に引越すことになる。

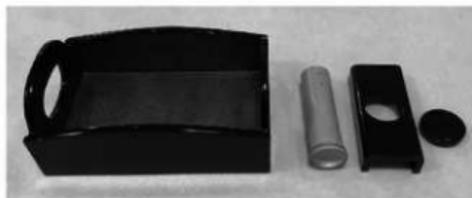


写真2 深江の岡田茂義氏邸で使われてきた煙草盆

戦災と進駐軍将校の居住

第二次世界大戦による敗戦で日本は連合軍の占領下に置かれ、岡田茂義邸の大部分は進駐軍が接収、岡田家一家は一階で生活した。接収されたエリアにオーストラリアのケントウエルという将校が家族連れで住み、バーバラという女の子、パパと名付けた犬を庭で飼っていた。戦後の食糧難のためか広い庭に鶏を放し飼いにしていた(写真3)。ケントウエル氏は紳士的な態度で接し、誠子さんが生まれたときにニットの子供服をプレゼントしたという。接収下での進駐軍と日本人の交流を物語る貴重なエピソードである。



写真3 深江の岡田茂義氏邸の南側の庭

戦災と戦後の農地解放、富裕税対策、借家・借地への占拠への対応など、岡田家は大きな課題に直面した。しかし東京在勤時代の茂義氏は十分対応できないことがあり、固定資産税の支払いが滞り銀行の給与の差し押さえをされたこともあったという。こうした結果に、よし子さんの叔父で住友銀行社長を務めた岡橋林からサラリーマンの心

得を論されるという笑えないエピソードもある。

昭和三十三年ごろに深江に戻ってからは、所有地の占拠者に対し、一件ずつ解決していった。とはいえ茂義氏は勤めもあり、よし子さんが宅地建物主任の資格を取り、弁護士と一緒に対応したという。

阪神・淡路大震災への対応

もう一つの苦難が戦災からちょうど半世紀たって起きた阪神・淡路大震災だった(写真4)。福田誠子さんは八〇歳近いよし子さんと九〇歳目の茂義氏とともに何度も深江に通った。倒壊して犠牲者が何人も出た木造アパートから道に投げ出された布団の異様な状況は目に焼き付いて離れないという。

震災復興を促進するため、地主が倒壊した借家を建て直す場合、借家人の借家権が借地権に代わるという、地主の権利を制限する震災特例法が成立、岡田家は深江に所有する土地への対処を再び求められた。

誠子さんは茂義氏と一緒に深江をめぐる、初めて深江と自らを結びつける故郷になったという。

茂義氏が「ここは昔連の池だったんだが、おじいちゃん



写真4 阪神・淡路大震災で全壊した正寿寺

写真5

震災犠牲者の三回忌に
茂義氏が寄贈した親鸞上人像



をだしてレンコン取りしてはったんや。ここは深江のためになることに使いたいんや」と言っていたという。

震災犠牲者の三回忌に当たる平成九年一月十七日に、茂義氏は正寿寺に親鸞上人像を寄贈した(写真5)。茂義氏が正寿寺住職と像についてあれこれ話しあうのをそばで聞いていて、誠子さんは茂義氏が「深江の人」であることを強く感じたという。

小磯良平との交流、絵画・音楽に親しむ

茂義氏は、大学時代にチェロに親しみ卒業後も続け、サンサーンスの「白鳥」を弾く腕前で楽譜が残っている。今回所蔵の楽譜と一緒に神戸

(茂左衛門)が

養子やっただからかな、自由になろうにお金が思うようになかったのか、朝早くからここにきて、舟



写真6

セロ演奏会のポスター。
神戸新聞社が後援

商大音楽部後援
奏会のポスター
が見つかつた
(写真6、7)。
七月四日金曜日
とあるので、昭
和五年(一九三

〇)だろう。NHK交響楽団の会員で晩年もよくコンサートに通っていたという。ゴルフが趣味で九〇歳を超えてもコースを回り、シングルに近い腕前だった。ドイツのカメラ、ライカに懲り、イギリスの高級車ジャガーに乗るなど、ハイカラな

シテイボーイだった。深江文化村を介してか、神戸市出身の洋画家小磯良平(一九〇三〜一九八八)とも知己を得た。小磯良平が大府出身の洋画家、田村孝之介(一九〇三〜一九八六)と台湾旅行に行く際に資金が不足。茂義氏に絵画購入を依頼し「君は僕の最初のバトロンだ」と言わせたと伝える。その絵画は深江の茂義氏邸に飾られ、現在は福田家に受け継がれている(写真8、9、10)。その後もマリー・ローランサンの絵画などを収集、室内に展示している。茂義氏の使った机や書



写真7 戦前のチェロの楽譜



写真8 小磯良平から直接購入した油絵

棚（写真11、12）も福田誠子さんが引き継ぐ。
 誠子さんは、夫福田仁司氏が日銀ニューヨーク事務所勤務時代に、ニューヨーク市マンハッタン区にあるフリック美術館を見学、岡田茂義氏邸での生活と共通性を感じたという。フリック美術館とは、実業家のヘンリー・クレイ・フリックの個人コレクションを、邸宅



写真9 小磯良平の作品。年代は1933年

だった館で展示公開している。小規模だが充実した所蔵品で知られ、絵画のほか彫刻・家具・陶磁器なども含まれている。誠子さんは「美術品は美術館、博物館に展示するものもいいが、生活の中で美術品を楽しむことの豊かさに共感した」という。誠子さんは留学生支援活動をライフワークにしてい



写真10 小磯良平の作品。
 年代は1934年

いて、ひな祭り

などに毎年自宅に三〇人ほど招待、日本の伝統的な家庭の文化を紹介している。正月に部下の行員を招いてき

た茂義氏邸での年始の風景に重なり合う。「深江の岡田家」の形を変えた継承というのが動機の一つという。深江で継承される岡田家ゆかりの石造遺品に加え、東京でも阪神モダンイズムに影響を受けた「深江」が伝え続けられている。



写真12 岡田茂義氏が使っていた書棚。茶器も多種そろえていた



写真11 福田誠子さんが譲り受けた岡田茂義氏の重厚なデスク

（大國正美）

この度、父茂左エ門五十回忌の法要を営むにつき、その際参列していただく皆様に深江の昔噺を書いた小冊子を作り差し上げたいと思いい、その原稿を平成九年八月九日に書き始めました。九十才の老軀に鞭を打って、朦朧とした記憶を辿りながらの作業でありますので、到底ご期待に添うようなものは出来てはおりませんが、何卒ご覧下さるようお願いいたします。

一、正月元旦、最初の行事

正月元旦の事始め、最初の行事は森の稲荷神社詣であった。五、六才の幼い頃から始まった事であるが、未明の暗い道を父に手を引かれて神社に辿り着く。最後の石段を上げれば焚き火が赤々と燃えているのを見て元氣付き、拝殿で礼拝を終えてこの焚き



写真13 昔の森の稲荷神社

火にあたり快い暖を取った。その内に空が次第に明るくなり、昇る初日を拝んだ。帰り道は明るい道だが、行き道は厳しい寒さの中の真つ暗な道なので随分長距離と感じた。岡田家は稲荷神社の氏子であったので、庭に祠、石灯籠、石の鳥居を構えてその分神をお祀りして、毎月、神田宮司に祝詞を

上げてもらった。

二、深江の氏神さま

氏神様である稲荷神社の起源を宮司神田衛治氏にお尋ねした。次の通りの回答をいただいた。

由緒。社伝によると元正天皇の霊龜元年（七一五年）卯月卯日の夜、深江沖に闇夜を照らす妙な光が現れた。人々が不思議に思って、海岸に集まっていると、波のまにまに一基の神輿が近づき、そして「われは稲荷の神霊、この山手の森かげに鎮座したい」と告げられた。神託通りにお祀りすると五穀豊穣になり平安な日が続いた。人々は神様の漂着を祝って毎年卯月卯日の日に祭りを行い「卯の葉祭り」と称して来た、と記載されて



写真14 戦前の祭礼の神輿渡御

いる。これを以てすれば稲荷神社は文字通り且つ鎮座あとのご利益を見ても正に農業の神、深江の農家の守護神である。また、神輿の船が岸に上陸すべく静かな大阪湾に入り、更に波すら無い淳茅の深江海岸に近寄って来たことも想像出来る。

又、氏子地域としての回答によると江戸時代までは保久良神社と共に近郊の本庄九ヶ村（森、深



写真16 明治末期の大日靈女神社



写真15 大正13年の狛犬

江、青木、北畑、中野、田辺、三条、小路、津知)の総氏神としてあつく信仰されたが、明治五年に氏子の命令で分裂し、明治十二年に村境界が他の荘村の仲介により以後、森・深江・青木の三地区が氏子地として残り、他は保久良神社の氏子地となった。

この稲荷神社には大正十三年一月氏子として岡田正蔵、いく、

が狛犬を献納している。この狛犬は先年の震災でも健在であった。

尚、深江本来の中心地に大日神社がある。その奉賛



図 江戸時代の本庄9カ村の範囲
明治22年に深江・青木・西青木
が合併して本庄村となる

会の会長志井保治氏に神社の事色々問いわせて祭神は大日靈女神、天照大神、仏号では大日如来であることを知り得た。

一月には一年のお願い事をする火祭り、七月には茅の輪をくぐってお詣りする輪くぐり祭があった。唯、大

日神社が現在の場所
に祀られた起源
については今の処
知り得ていない。
当時、

講というものを中心として交友の輪を作ったものだ。伊勢講、大峰講、摩耶講などがあった。大峰講は大峰山の山上、嶽にお参りする行事で一度は必ず行かねば



写真17 明治41年の大日靈女神社



写真19 大日靈女神社の茅の輪くくり

もらって前へ摺り落すように突き出される。下は千円の谷である。そこで、親に孝行するか、ハイ。勉強するか、ハイ等の問答の末、漸く引き上げられて生き返った思いで起き



写真18 大正時代の大日靈女神社

ならない事になっていた。小学校一、二年の頃であった。お参りする一行と共にその前日一同海に浸って身を清めて大和の洞川（洞川）に向かう。その宿に一泊して、当日は朝早く暗い内に登山を始め険しい坂道を踏破して宮祠に参拝した。帰り道の途中に四方を見晴らす岩壁があり、いよいよ此処で行が始まる。身を岩壁に伏せて岩に乗り出すと、足を押さえて

上がった。帰りは吉野へ出る道だった。これが登山の本道であるが非常な距離がある。従って、下り坂ではあるが長い道程のため、而も前日の疲れもあって歩けなくなり、手を貸してもらいながら泣きそうになって辿り着いた。

摩耶講は神戸の裏山である摩耶山の山寺の講で寺には釈迦の母、摩耶夫人が祀られている。寺の講で毎年一月には自家製の味噌、見た所金山寺味噌と全く同じであり、小麦の粒がそのまま残されているが味は金山寺の様に甘くはなく普通の味噌の味である。寺僧がわざわざ届けてくれるのでお布施料を差し上げていた。

伊勢講については最後になったが何れの講よりもその組織が大きかった様に思う。お伊勢参りと云えば国民としては欠かさない行事であり、折あれば必ず伊勢神宮参拝をしたものだ。而も職業の各業種に於て各々伊勢講を持っており、その業種の発展のためにその交流を深めて相互扶助を行った。中でも一月の初詣では賑わったもので五十鈴川を渡り、大きな鳥居をくぐって長い砂利道を踏んで宮祠に参拝した。

この伊勢講の力で飯令、氏神様が森にあって、地元にも神



写真20 大峰山へ参る深栄講の子供装束（大正8年）



写真21 森の稲荷神社の伊勢講史料



写真22 再建された狛犬に付けられたプレート

社を設けて加護を願うべく、伊勢神宮の分神天照大神を祀る大日神社と定めたのではないかと推量する。もちろん農業も漁業もこの庇護の下にはいる。

大正十三年岡田正蔵は大日神社にも狛犬を奉獻していたのであるが、その狛犬が今般の阪神大震災によって倒壊した社殿の下敷となり大破し修理不能となったので私がこの際、再建を決定して平成八年十二月十一日その完成の除幕式と狛犬再建報告祭を催し、森の稲荷神社の神田宮司による齋式を行った。

三、明治天皇の御霊への深夜の通拝

幼い頃の記憶として残っているのは、明治天皇が崩御されてその御霊を通拝するために深夜小学校に集ったことである。明治四十五年のことである。私は明治四十年生まれ、満九十才で



①写真23
②写真24

明治32年完成の校舎
大正9年完成の校舎



あるので八十五年前のこととなる。

家から父と共に暗い道を歩き出したのが出来たばかりの時で新道と呼んだ。道路幅は今の半分位のものであったが大きな砂利が敷きつめてあって歩くのに苦労しつつ、小学校に辿り着いた。途中で、矢張り通拝に集まる人たちと合流した。

暗闇の校庭の中央に薪を燃やして篝火かまどを焚いていた。電灯な



写真25 「摂津名所図会」に描かれた踊り松



写真26 大正末期の絵葉書になった踊り松



写真27 戦前の踊り松と金毘羅宮

どの設備は有る苦がない。この篝火をたよりに集合し東に向かって通祥した。帰り道はさらに一層遠さと暗さを感じた。

四、高橋川の踊り松と淳茅の海

新道のことを書いたが、従来の道は高橋川に架かっている深江橋の道であり、旧道と云った。北の方には西国街道があり、西国諸大名の参勤交代の道で、岡本、野寄、森、等に沿って京都に通じていた。この高橋川の堤には「踊り松」があり西国街道と共に有名であった。太い大きな幹の黒松が二、三本聳え立っ

ており、淳茅の海の潮風を受けてまことに見事な枝振りを見せていた。その下を流れる高橋川には、ふな、もろこ、川蝦などが清流を泳いでおり、網を以てこれを捕えることが楽しみだった。その辺りの地名を踊り松といったが今は本町三丁目となり味気ない。この川が流れ込む海岸が淳茅の海である。茅とは「かや」であり、淳とは水の淀みである。人偏の停は人の止るところ、更に淳と淳の区別も弁まえねばならない。この浪打ち際は全く白砂の海岸であり、毎年京都大学の水泳部の天幕を張っての合宿地となっており、我々はそこで泳ぐことを覚えた。

元々深江の浜は網引きの所であった。私の祖先も網引きの元締めをやっており、網屋茂左衛門と云った。網を束ねて船に積み、沖まで漕ぎ出して網を広げ延ばして左右の綱を船と共に岸



写真28 昭和14年ごろの地引網漁 (福田賢二氏撮影)

に漕ぎ付ける。この太い綱を、各々十人位の日に焼けて真っ黒な男達が左右に分かれ、「えいやえいや」と綱を引く。所謂綱引きだ。綱を船に引き揚げるまでに、一時間近くかかった様に覚えてる。漁獲は片口鯖だ。そこへ子供達が集まって来て各自、船の中の獲物を掻き攫って、晩業に持ち帰る。この事情をよく知っている綱引達は大目に見てくれる。この漁獲には色々な魚類が捕獲される。鯛や平目が躍っている。時には「おこぜ」が混じっており、あの遅い真黒な綱引きがこれに刺されて声を揚げて泣いているのを見た。

我々小学生の子供達が、この綱引きを真似て小型な



写真29 網屋茂左衛門の経営史料 (岡田堯至氏所蔵、史料館寄託)

がら網の用具を揃えてもらって、お盆祭りの灯籠流しで短冊やお供物を積んで海に流された小さな船を沖で拾い上げ岸に持って帰り、その小舟に用意してあった網の用具を積み込み、皆で泳いで小舟を沖まで運び網を広げて沈め、綱を持って小舟と共に岸に泳ぎ帰る。本式に左右に分かれて綱を引く。矢張り鯖を主とするが、色々な獲物があった。小さい獲物であるが「竜の落し子」が獲れたことを覚えてる。大阪湾にもこの様な生物が当時生息していたのだ。この綱引きの遊びにも、前記の京都大学水泳部の水練教育が非常に役に立った。

踊り松から海岸に向かって広い敷地があり、それより白砂の海辺が広がる。ここが京大水泳部の合宿地である。この大きな広場は英国人、ハンターの住居地であった。日本文字で「範多」を使った。貿易商であり今も尚、範多商會として存在していると思うが判然とせず。背の高い息子があり神戸一中のサッカーのゴールキーパーをやっていた。母親は日本人で混血児かもしれない。

(岡田茂義遺稿)



写真30 ハンター邸宅

正寿寺の創立と幕末の事件

深江塾 森 口 健 一

寺と神社

「古い町」にあって「新しい町」にないのが寺と神社である。戦後にできた所謂ニュータウンという所に、お寺や神社がある



写真1 震災以前のありし日の正寿寺（昭和36年）

というところは寡聞にして知らない。

季節の移り変わりに応じて神社を中心に祭りという名の神事が行われる。お寺では、人生の終末やその後は縁者を中心に、多くの人がお寺に関わることになる。寺や神社はその地域の人の生活に本来は身近であり欠かせない施設というものである。

深江には、寺は浄土真宗本願寺派の正寿寺、神社は通称大日神社、正式には大日靈女神社がある。立地しているのはいずれも深江本町三丁目である。深江の町は古い歴史のある町なのだとともに平成七年（一九九五）の阪神・淡路大震災で全壊し再建された。正寿寺は現在は鉄筋コンクリートのモダンな建物に変わったが、それまでは重厚な歴史の重みを感じさせる本堂だった（写真1）。

人々は、葬儀や法要でこの寺を利用し、季節の移り変わりに応じて神社の行事を担うことにより、時間を共有してきた。この寺と神社が、深江における信仰の場として深江の歴史を刻んできたことに異議を挟む人はあるまい。

しかし永い時間が共有されながら、むしろ永いゆえか、この寺や神社の由来は定かでない。この寺がなぜこの宗派であるのか？ その宗派と深江の人々の関係はどうなっているのか？ いつからこの場所に寺はあるのか？

この「深江物語」も寺と神社を語らずに、物語は成り立たない。それにしても、寺と神社について聞くべき人がいない。文字になった資料（史料）がほとんどない。そのためであろう、寺も神社もその由来歴史には異説がある。

現在一般の人が比較的に見やすいのは『本庄村史』にある記述であろう。この書籍では幾つかの文献を紹介しているが、確定した由来、歴史は結局不明である。村史にも引用されている『武庫郡誌』を紐解いてみた。

『武庫郡誌』の正寿寺の記述

『武庫郡誌』を開く。該当箇所は「第一三節 仏閣 第三項

永井山正寿寺（深江字垣添）である。以下に、『武庫郡誌』の当該記述を全文引用する。なお旧字は新字に改めた。

【開基其他】真宗西本願寺末京都六条常楽寺末なり。本尊は阿弥陀如来にして、寛永十癸酉年（紀元二二九三年）僧空照の開基する所、境内三百六十坪、檀徒五百余戸あり。【沿革】往昔芦屋川西字池の下に一部落あり。之を永井屋敷と云ひ、其西方四ツ松川附近字葉王寺及び堂の後に一部落あり、之を葉王寺巨家と云へり。其部落に一寺あり葉王寺と称し、真言宗にして大日如来を安置せしが、文明年間（紀元二二一九—四六年）本願寺八世蓮如上人布教の際、時の住職觀空之に帰依し、改宗して弟子となり、道場延寿寺と称し阿弥陀如来を本尊とせり。

寛永十年（紀元二二九三年）之を現今の位置に移転せり。時に葉王寺・永井屋敷の両部落は合同して深江村と称したり。

会々永井三左衛門、薙髮して空照と称し、寺を永井山正寿寺道場と改め其住職となれり。之を当寺の開基となす。

同十九年十二月十七日、本山より木仏を下附されし、寺号を許さる。由りて正寿寺と称するに至る。

天保十二年（紀元二五〇一年）本堂の一部消失し、記録悉く烏有に帰す。

故に当記を尻池高福寺より転写し、今に存す。

【宝物】宝物を挙げれば左の如し。

一、本尊阿弥陀如来立像

一、親鸞聖人御影 寛永十九年壬午十二月許可
一、蓮如上人御影 文化元年甲子年三月三日許可
右の外、種々の御影あり。

以上『武庫郡誌』によれば、室町時代後半に葉王寺という真言宗の寺があった。文明年間（一四六九—一八七）浄土真宗の蓮如に帰依した葉王寺の住職は、改宗とともに寺の名前も延寿寺と変えた。寛永十年（一六三三）、寺を葉王寺から字垣添へ移し、さらに寛永十九年（一六四二）には京都の本山から正寿寺の寺号を許可されて現在に至ったという。

【武庫郡誌】の読み解き

以上の文を筆者なりに読み解いてみたい。

まず所在地の「深江垣添」の垣添とは正寿寺の現在地の旧地名、小字名である。ちなみに大日神社の旧地名字名は垣内である。芦屋川河口近くの西、深江の東端で現在の芦屋との境界近く、阪神電車軌道の北側に宝島池あるいは皿池と呼ばれる溜池がある。溜池南の小字名に「池の下」があった。現在の深江本町一丁目、昭和四十七年までは繁昌町と呼ばれていた所である。その付近に一つの集落があった。この集落を永井屋敷と言った。現在の深江と芦屋市の境界近く、字池の下を取り巻くように永井の字があった。深江南町一丁目から北に向かって深江本町一丁目、同北町一丁目は永井浜、南永井、下永井、前永井、西永井、中永井、上永井という小字が連なっていた。

その集落の西の方の高橋川の支流の四ツ松川付近の字葉王寺と堂の後に一部落があった。小字の「堂の後」というのは明治

移転から九年の後、寛永十九年（一六四二）十二月十七日、本山から木仏を受けて正寿寺と名乗ることが正式に認められた。これらをもって「空昭（空照）」を正寿寺の開基とした。

正寿寺には開基の空照を初代とする住職の歴代忌日が保存されている（写真？）。

以上が大正十年（一九二一）発行の『武庫郡誌』の正寿寺に関する記述で、その元になったのは「尻池高福寺より転写」と断っている。その理由は、天保十二年（一八四一）の火災で正寿寺本堂が焼けて記録がごとごとく無くなったためであると記している。なお、神戸市長田区尻池には浄土真宗の寺「高福寺」が現存している。

一方『本庄村史』地理編・民俗編によ



写真3 正寿寺過去帳「蓮華勝會録」
天保12年から始まっている

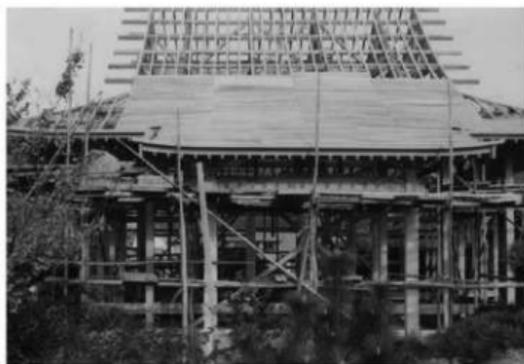


写真4 再建中の正寿寺（昭和36年）正寿寺提供



写真5 屋根がほぼ完成（同）

れば、寺伝では天文年間（一五三二―一五五五）永井氏の出身の僧正福が、本願寺九世実如の裏書のある阿弥陀如来像を安置したともいう。少し内容は食い違っているが、戦国時代に真言宗から浄土真宗に改宗したという点では共通している。

正寿寺に残る最古の過去帳

『武庫郡誌』の記述は「尻池高福寺より転写」と断っているように、正寿寺の一次史料ではない。ただ、転写した理由として「天保十二年の火災で本堂が焼けて記録がなくなった」とい

う信憑性を裏付けるものとして、正寿寺に現存する最古の「過去帳」がある。その過去帳は「天保十二年」から始まっているのである（写真3）。

江戸時代の深江の住民はほぼ全てが浄土真宗の信者であり正寿寺の檀家である。そのため住民の死去に伴う記録は正寿寺の過去帳に全てが記録される。

この過去帳の中身は個人情報ということで記載されている親族以外は見る事はできない。「武庫郡誌」の記載の天保十二年の火災によって本堂が焼けて記録が失われたという記述と、現存する最古の過去帳の年が符合する。

記録の消失という意味では、この天保十二年（一八四一）のおよそ一〇〇年後の昭和二十年（一九四五）の空襲のため多くの史料が失われたが、過去帳だけは持ち出されて今に伝わる。

本堂も焼失したが昭和三十六年に再建された（写真4、5）。

本造で所謂宮大工による建築様式であった。詳細は不明であるが本堂は江戸時代から伝わる建築様式を踏襲したといわれている。当時総工費が五〇〇万円といわれた。令和の現在価値ではおよそ一億円にもなるだろうか。

新しい発見：神戸事件の舞台

江戸時代の天保十二年の火災以後新たに作成され、昭和二十年の空襲によって焼失した記録の中に含まれていたかもしれない大事件が、最近になって分かった。

発端は、平成三十一年、岡山県の郷土歴史研究家の衛藤廣隆氏が、神戸事件の文献調査中に「深江村の正寿寺」という名が出てきたということ、寺に来訪されたことに始まる。

神戸事件は最近では学校の教科書にも掲載されることもなく「知る人ぞ知る」だけの出来事になってしまっている。しかし、明治新政府が正式に外国に行った最初の外交交渉で、日本の近代外交史、政治史にとって、重要な出来事である。

事件は、神戸の港に停泊する米英など西欧人と岡山方面から進軍してきた岡山池田藩兵とが、神戸元町の三宮神社付近で衝突したことに始まる。進軍する池田藩の隊列を西欧人が横切ったことに對し、池田藩のその場の責任者が手槍で持って西欧人を威嚇したこと、双方の発砲事件になった。慶応四年（一八六八、九月に明治に改元）一月のことである。事件発生とともに武力に優れる西欧列強の軍隊によって、神戸の町は封鎖占領される事態となった。

明治新政府と西欧諸国との様々な外交交渉の結果、「一人の武士の切腹によって、その命と引き換えに西欧列強との戦争や神戸の町を外国に占領されることを避けられた」のである。そのサムライ・武士の名を瀧善三郎という。

岡山の歴史研究家衛藤氏から教授いただいた文献に沿って深江に關係のある出来事を追ってみる。

事件当時、池田藩は西宮の警備を命じられており、打出に陣屋があった。池田藩の責任者の一人である瀧善三郎たちは摩耶山、六甲山麓を東に進み森村（現東灘区森北町）や深江村の寺を中心に分宿していた。瀧善三郎の宿は森村の志井六兵衛の家だったという（岡久渭城『明治維新神戸事件』瀧正信顯彰會、一九三八年）。

神戸の居留地付近での発砲事件に伴い、西欧列強は新政府に

対し「下手人を犯罪者として死罪」を要求してきたのである。事件当時の岡山池田藩の進軍は正規軍の行進であり、その進行を妨害した西欧人は無礼な行動である。

明治政府は、諸外国に対し正当な政府であり外交権とその交渉力を示すため、結果として外国の要求を呑むことにした。即ち、瀧善三郎の切腹である。森村に駐屯していた瀧善三郎は、警護の者たちに付き添われ、深江村の正寿寺に下った。正寿寺のすぐ南には西国浜街道があり、刑場即ち切腹場所である兵庫津の永福寺に繋がっている。

神戸事件と瀧善三郎の武士としての行動や切腹の作法については、かの新渡戸稲造の有名な著作「武士道」にも紹介されている。瀧善三郎は、その「武士道」にも書かれているほどに立派な人物であつたらしい。文武両道に秀でたサムライであつた。彼は死出の道を森村から深江村の正寿寺に向かう。

六甲山の麓、森に囲まれた森村の寺から海岸に近く西国浜街道に近い深江村の正寿寺を経て、瀧善三郎は罪人として切腹場所である兵庫の寺へ向かった。その胸中を瀧善三郎は歌に託す。

いまははや 森の日陰と なりぬれど

朝日に匂う やまと魂

「森の日陰」の森は森村を示している事は容易に分かる。

「わが身は死んで」森村の山手の木々の木陰に隠れてしまうけれど、朝日に輝くのは武士の心、大和魂である（それは永遠である）という意味であらう。

きのう見し 夢は今更ひきかえて

神戸の浦に 名をや残さん

「昨日まで」見た（将来の）夢は、今更どうにもならないけれど、この神戸の海辺に（武士の名譽の）名こそ残したいものである」と解釈できるであらう。

神戸事件は、神戸の歴史を語る中では欠かせない事件である。あるいは日本外交史を学ぼうと思う人においては、その知識は必須の事柄であらう。そのような歴史的事件の顛末の中で、深江の正寿寺が舞台として出てくることは驚きであり、多少の誇りの気持ちも隠せない気分になる。

これまでの深江の歴史の事跡の中から、「本庄村史」でも触れられていない話である。この神戸事件と深江村や正寿寺のかかわりについては、深江の歴史として新しく記憶されるべき一ページが加えられたと思う。

協力のお礼

この原稿作成に当たっては正寿寺の韓信勝住職から資料の提供など、多くの協力を頂きました。また、岡山の郷土史家衛藤氏からは平成三十一年の正寿寺における講演会をはじめ、氏の話を参考にさせていただきました。なお、深江塾は令和二年度例会はコロナウイルス禍のため開催でした。森口が原稿を書き、大國が修正しました。

図書館サービス・五倍に激増

神戸市立図書館の窓口やインターネットで予約した本を受け取ったり返却するサービスが二〇二〇年度は利用者、冊数とも激増した。新型コロナウイルスで緊急事態宣言が出されて、果ごもり需要が出たと思われるが、緊急事態宣言解除後も毎月一〇〇〇冊以上をキープしている。コロナ前には戻らない。新しい生活スタイルが定着した。

二〇二〇年四月の貸出実績は新型コロナウイルスによる休館もあって延べ八〇人、二七〇冊、五月は延べ一七人、三〇八冊の低調なスタートになったが、六月に延べ三三五人、一〇六三冊と激増した。以来毎月貸出・返却とも一〇〇〇冊を上回った。十一月は延べ四六九人、一三四一冊といずれも過去最高を記録。貸出の月平均は一九年度は二四一人、六八九冊だったのに対し、二〇年度は三五三人、一〇三一冊となった。周知が進んだこと、コロナ禍で自宅で本を借りて読む需要が増えたこと、休館せずサービスを続けたことが背景にあると思われる。

編集後記

今年には神戸深江生活文化史料室が設けられて四〇周年に当たる。これまで節目の年には祝賀会を開催してきたが、コロナ禍で吹き飛んだ。史料館が続けられているのも多くの方の支えがあつたこと。また史料館員の中にはさまざまな理由で去った人もいる。しかし今年二月から二星清美さんが新たに加わってくれた。これからも地域文化を伝えるために努力を続けたい。祝杯はコロナ後に必ず。それまでの辛抱だ。

史料館日誌抄

史料館副館長 道谷 卓

二〇二〇年四月～二一年三月

＜二〇二〇年＞

4月7日 緊急事態宣言が兵庫県に発出されたため、史料館（図書館業務とも）は臨時休館措置をとる。

5月14日 兵庫県の緊急事態宣言が解除されるが、史料館（図書館業務とも）は5月末まで休館措置とする。

6月6日 史料館再開（図書館業務とも）。

9月5日 本山南中学校郷土研究部（見学者 二〇名）

11月7日 平和マップをつなぐ会（見学者 三〇名）

＜二〇二一年＞

1月20日 本山南小学校 三年生（見学者 七六名）

1月28日 本庄小学校 三年生（見学者 七〇名）

1月29日 本庄小学校 三年生（見学者 七五名）

資料寄贈者ご芳名

（敬称略）二〇二〇年四月～二一年三月

近藤マサ子／大國美智子／藤原徹也／小野寺恵美子／
福田誠子（道谷 卓記）

『生活文化史』 第49号 2021・3・31

編集／大國正美

発行／神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-15-17

☎ 078-4531-4980（FAX兼用）

http://fukee-museum.la.coccon.jp/